

フェニックス・モザイク「岩間がくれの堇花」



She dwelt among the untrodden ways
Beside the springs of Dove;
A maid whom there were none to praise,
And very few to love:

A violet by a mossy stone
Half hidden from the eye !
— Fair as a star, when only one
Is shining in the sky.

She lived unknown, and few could know
When Lucy ceased to be;
But she is in her grave, and, oh,
The difference to me !

引用は The Complete Poetical Works of William Wordsworth LONDON: MACMILLAN 1888 による。

人里遠く、ダブの泉のそば近く住んでいた。
美しさを賞める人もなく、
愛の言葉も知らない乙女。

苔むした岩角に、人目をさけて咲くすみれの花。
—ただひとつ夜空に光る
星のような美しさ

知る人もなく生き、またその死を知る人もなかった。

だが、ルーシーはいま墓の中、

ああ、私の世界はすべて変わった。

W. ワーズワース『ルーシー詩篇』（部分）加納秀夫訳



西壁*のモザイクは、この詩の形象化であって、その一節にある「苔むした岩間の堇の花」を基調として、これに星を対応させ、詩的に交錯した2本の線でこれを結ぶという考えに基づいています。右の方は太陽で、私がかつて北欧のロダンといわれるカール・ミレスのアトリエを尋ねた時に、その入口に「太陽の輝く間、私をして働かしめよ」と書いてあったことに感動し、太陽の永久性を伴奏としてこれに配置しました。

また、屋上の南側は2羽の鳩と無限大の記号とをもって限りない友情を表わし、北側は「芽ばえ」から成長開化を意味しています。

南側東端壁のモザイクは、樹根を大地に力強く張り、更に蒼穹にその枝を無限に拡げる — 強烈な生きる力の創造と繁栄を表現しました。

材料には、せとかけ、タイルなどを用いました。これは、世の中に役に立たない捨てられてしまうようなものでも、一つ一つを拾いあげて、そのところを得させるなら全体としてみれば美しく、それぞれ役に立っていくものである。貧しい材料で、もっとも高価な内容、価値あるものを作りたい。どんな小さな粗末なものでも、おろそかに考えず、その一つ一つの心を尊び、大切にその存在を認め合うことこそ、この世で大切なことであるという精神をこめてつくり上げました。

今井 兼次

いまい けんじ
今井 兼次（建築美術家、早稲田大学名誉教授、日本芸術院会員 1895～1987）

代表作に礫山美術館、旧根津美術館、遠山記念館、日本26聖人殉教記念館（日本建築学会作品賞）、桃華楽堂（宮内庁楽部香淳皇后還暦記念ホール 日本芸術院賞、BCS賞）、早稲田大学図書館（現 會津八一記念博物館）、同大演劇博物館、大隈記念館（佐賀）など。アントニオ・ガウディを高く評価し、日本に紹介した功績でスペインよりアルフォンソ十世賢王勲章受章。帝国美術学院（現 武蔵野美術大学）、多摩美術学校（現 多摩美術大学）の設立にも参加した。

*原文「東洋女子短期大学学生便覧」では南壁となっているが、正しくは西壁。

「フェニックス・モザイク」は東洋女子短期大学開学10周年記念事業として旧1～3号館を建設した際、そのシンボルとして制作されました。デザインと制作指導を担当したのは建築美術家で早稲田大学理工学部・大学院教授（当時）の今井兼次、竣工は昭和36（1961）年2月です。

「岩間がくれの堇花」のほか屋上塔屋には「永遠の友情」、「芽生えから開花」、「思い出の四季」を配し、昭和39年に東壁面の「繁栄の樹」が加えられ、その総称が「フェニックス・モザイク」です。このタイトルは“永続の力強さ”や“永遠の歓び”を表現し、それに不死鳥（フェニックス）のイメージを重ねたものです。安曇野にある碌山美術館の尖塔にはフェニックスが象徴的に飾られており、今井兼次が好んで用いたモチーフでした。今井兼次モザイク壁画の連作総称でもあり、日本26聖人殉教記念館（長崎市）、桃華楽堂（皇居 香淳皇后還暦記念ホール）もフェニックス・モザイクシリーズです。

当時の学生、卒業生、教職員が持ち寄った陶片、ガラス片が巧みに組み込まれていますが、主な材料は信楽などで焼かれた専用のタイルです。このために今井兼次は窯元まで出向いて指導を行いました。

国文学者古関吉雄（当時、明治大学教授で後に本学非常勤講師）が作詞した「学生歌」には、西壁モザイクとその主題であるワーズワースの詩が詠い込まれ、学園祭の名称にもフェニックスを冠していました。

「岩間がくれの堇花」は平成19年、創立80周年を期して建設した新1号館に組み込まれて東洋学園大学に継承されたことが評価され、同年度の文京区都市景観賞（景観創造賞）を受賞しました。解体された4作品の断片は文京ふるさと歴史館の企画展で展示の後、同館やタイル生産の盛んな岐阜県多治見市の資料館などに寄贈されました。本学史料室でも保存、展示しています。



「永遠の友情」



「芽生えから開花」



左「思い出の四季」、右「芽生えから開花」